

〈金融史パネル〉

国際通貨システムの規制と改革
——1960-70年代の OECD-WP3 を中心に——

座長：早稲田大学 矢後 和彦

パネルの主旨

本パネルの課題は、1960年代から70年代にかけて国際通貨システムをめぐってかわされた論争をあきらかにすることである。具体的には、経済協力開発機構（OECD）経済政策委員会第三作業部会（WP3）とその周辺でかわされた政策論争に焦点をあてて「規制」「改革」の諸構想を対比・検証する。世界金融危機の直近の進展を念頭におきながら、パネルでは、全体として「規制」論の正当性を改めて歴史のなかに探るという方向感を提示することとなる。

アルタムーラ報告は1960年代に拡大したユーロカレンシー市場をめぐって国際金融機関等でかわされた「規制」論（Controllers）と「自由市場」論（Free-Marketeers）の論争をとりあげる。西川報告は1971年のニクソン・ショックを中心に OECD-WP3 の内部で練り上げられた国際通貨システム改革論を検証する。ガレアッツィ報告は同時期にフランスの政府・中央銀行が OECD-WP3 で行った提言をふりかえり、フランスの側からの「規制」「改革」論を吟味する。いずれの報告も最近公開がはじまった OECD 等の一次資料に依拠してこれまでにない歴史像を発掘し、「規制」論の豊富な蓄積と今後の可能性を展望する。

なお報告者はいずれも若手・新進の研究者であり、本パネルは国際金融史研究の将来における世界的水準を画する研究交流の場としても機能する。